

# 物語に見る女主人公のキャリア形成<sup>※</sup>

## ——源氏物語 紫の上の変容——

Career Formation of the Heroine of *The Tale of Genji*  
——Transformation of Murasakinoue——

足立 雍子

ADACHI Yasuko

**要旨：**『源氏物語』に登場する紫の上を第一部、特に賢木、須磨、明石、漣標の巻においてその成長過程を女性のライフステージとして捉え考察する。女主人公が物語のなかでキャリア形成して行く様子を原文に即して読みを進めると、物語の読みがまた新たに出来るのではないかという試みである。

**キーワード：**源氏物語、紫の上、キャリア形成、世

### 1. はじめに

『源氏物語』において女主人公を担う紫の上の成女儀礼は異例である。物語は儀礼自体を語るよりも、突如源氏との結婚に狼狽する紫の上を描く。しかし約一年後に再登場する紫の上にはもはやその姿は見いだせない。本稿では再登場する紫の上の、その後を変容<sup>1</sup>として捉え、その姿を賢木、須磨、明石、漣標巻を追って考える。その際、特に「世」という語に他者と自身との位置関係を表す語意として注目し、その手掛かりとする。また、女性の生涯、ライフステージを、成長-探索-確立-持続-終盤の段階として考える時、紫の上自身のアイデンティティを位置付ける過程として捉えることが出来るのではないか、その可能性を探る<sup>2</sup>。

---

※ 本稿は2016年度佛教大学国語国文学学会並びに2018年度日本産業科学学会にての発表の一部を加筆修正したものである。

## 2. 世人もめできこゆ

葵巻後半突如の新枕とそれに続く裳着儀礼の描写後再び紫の上が物語に登場するのは賢木巻である。その紫の上の状況を世間の人々は称賛する。

西の対の姫君の御幸ひを世人もめできこゆ。少納言などの、人知れず、故尼君の御祈りのしるし、と見たてまつる。父親王も思ふさまに聞こえかはしたまふ。嫡腹の、限りなく、とおほすは、はかばかしうもえあらぬに、ねたげなる事多くて、継母の北の方はやすからず、おほすべし。物語にことさらに作り出でたるやうなる御ありさまなり。

(小学館『古典文学全集』「源氏物語」賢木巻96頁)  
(以下巻名・頁数を示す)(下線筆者)

裳着儀後、紫の上は兵部卿宮の外腹の娘であり、源氏と同居する妻であることが公表されると世人すなわち世間一般が紫の上の幸福をめでたのである。そしてそれがあたかも作り物語の幸運な姫君であるかのように語った。源氏によって二条院へ連れ出された後音信不通であった実父兵部卿宮とも再び文通などの交流が生じた。そのような姫君の幸運を乳母の少納言は祖母の信仰のお陰と思う。そこには継子虐譚の、迫害を受けた子が神仏の加護により世に出ていく物語の形式を見る事ができる。裳着儀礼により一応は貴族、宮廷社会に公認された。然し少納言の喜びも東の間、内実には源氏の女性関係を危惧しているのである。「ここかしこにうち忍びて通ひたまふ所どころは」(葵19)などと表面には書かれずとも源氏には通う女性が多くいたのである。

少納言はうれしと聞くものからなほあやふく思ひきこゆ。やむごとなき忍び所多うかかづらひたまへれば、またわづらはしきや立ちかはりたまはむと思ふぞ、憎き心なるや。

(葵62)

乳母の心配していたとおり紫の上を巡る周囲の状況は危うく脆いものであった。世間からの認知と実際とは大きな差異がある<sup>3</sup>。一方乳母の心配とは別に賢木巻での源氏を巡る状況は、悪化していたのである。即ち父桐壺院崩御後政局は大変換、右大臣の勢力が増大し、左大臣家と源氏は不遇な時代になっていた。しかしながら、源氏は相変わらず反対勢力である右大臣の六の君隴月夜との密会を繰り返していた。しかしついに露顕する結果となり、弘徽殿太后により陰謀が策

略されることになる。源氏はそのような折藤壺に再度の逢瀬を迫るが拒否に遭い、その気持ちを信仰に求め雲林院に参籠し出家をも考えていた。但し出家を止めるのは紫の上の存在であることは源氏も承知している。「もの心細く、なぞや、世に経ればうさこそまさされ、とおほし立つには、この女君のいとらうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへえるを、ふり棄てむこといとかたし。」(賢木105)と、源氏に頼り切っている紫の上の姿が語られる。一方源氏の雲林院参籠中ひたすら源氏を待ち慕っている紫の上は、既に一年前の紫の上ではなかった。葵巻での新枕での衝撃から源氏を疎んでいた紫の上は、約一年経過後、源氏に想いを寄せる新妻の姿で再登場する。

### 3. 世の中いかがあらむー成長

女君は、日ごろのほどに、ねびまさりたまへる心地して、いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へる気色の、心苦しうあはれにおほえたまへば、あいなき心のさまざま乱るるやしるからむ「色かはる」とありしもうたうおほえて、常よりことに語らひきこえたまふ<sup>4</sup>。

(賢木113)

冷静に物事を見極めようとする成長した紫の上の姿がある。自身と源氏との関係を考えると同時に源氏の周囲の情勢をも冷静に見極めようとしている。政局の変換により、源氏への風当たりが強くなっていく状況のなか、新年を迎えて源氏の二条院への参賀客も減り、門の辺りも以前のように馬や車で込み合うこともなく、世間の冷たさを味わう源氏とその家司の姿を間近で見ているであろう。従って紫の上にもその状態は理解できていた。

しかし源氏はそのような逆境でありながら、再度藤壺への接近を試みるが藤壺からは必死の拒絶に会う。一方右大臣の六の君、弘徽殿大后の妹朧月夜とは禁断の密会を繰り返していた。「いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へる気色の」との紫の上であった。一体紫の上は何を「思へる」のであったのだろうか。「世の中」がどのようになるのであろうかと沈思している姿であるが、新枕後の源氏を疎んでいた少女から既に成女として、源氏の妻としての自身の立つ位置を客観的に思考する姿がある。さらに源氏を取り巻く政局の大変換が及ぼす影響を源氏とともに考えているのである。素直に現実に対して疑問を持つ紫の上は成長する女主人公として再登場するのである。

源氏の周囲の変化は顕著でそれは目にも明らかなため把握できるとして、では源氏が危険を冒

してでも密会を繰り返す朧月夜との関係に、紫の上は気づいていたのであろうか。

後年朝顔巻で、源氏が朧月夜について語った折、紫の上は朧月夜について述べる。「尚侍こそは、らうらうじくゆゑゆゑしき方は人にまさりたまへれ。浅はかなる筋など、もて離れたまへりける人の御心を、あやしくもありけることどもかな」(朝顔485)と。紫の上は朧月夜を褒める言葉を連ねるが、内実はその反対で、嫉妬からの言葉と受け取られることを回避するため、多少ほかした言い方をしながら、源氏にくぎを刺したのであろう。「ここで紫の上が朧月夜と源氏の間を語るの唐突であるように思う。」<sup>5</sup>との見解もあるが、紫の上は源氏の須磨退去の原因の一つは朧月夜との密会であるとの認識に至ったと考える。須磨巻で明石の尼君は源氏の評判を京人から耳にしていると語られている。「母、あなかたはや。京の人の語りを聞けば、やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、」(須磨202)明石の尼君は噂話で源氏の須磨への退去原因が、朧月夜との密会であることを知っていたのであるから、紫の上の耳には当然入っていたであろう。紫の上自身は身辺の乳母、女房、女童などからの情報・パーソナルネットワークにより源氏を取り巻く政情を理解したのである<sup>6</sup>。

一方この時期紫の上は源氏と藤壺の関係をどの程度認識していたのか。物語の中では紫の上は藤壺とは叔母姪の関係でありながら、生涯をとおして二人には接点はなかった。同様朝顔巻で源氏は藤壺について語る。それを聞く紫の上の反応は物語には描かれない。源氏の目には藤壺に似る紫の上が再認識されるまでであった<sup>7</sup>。その夜源氏の枕元に藤壺が出現する。涙する源氏の傍で紫の上は「うちもみじろかで臥したまへり」(朝顔485)と語られる。賢木巻での成長が朝顔巻で更に展開し紫の上の変容する姿として描かれるのである。自身の境遇をも含めて沈思する紫の上には、葵巻での少女時代から成女へと成長する姿を見いだせるのである。源氏を客観的に見つめ、思考する紫の上は源氏の思惑からは抜け出し、女性として自己を確立しつつあった。

#### 4. かかる世を見る外に－探索

須磨巻冒頭「世<sup>8</sup>の中いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば」、(須磨153)弘徽殿太后の陰謀により失脚する前に源氏は自ら須磨へと退去することを決意する。

「昨夜はしかじかして夜更けにしかばなん。例の思はずなるさまにや思しなしつる。

かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離る際には、心苦しきことのおのづから多かりけるを、ひたや籠りにてやは。常なき世に、人にも情けなきものと、心おかれはてんと、いとほしうてなむ」と聞こえたまへば、「かかる世を見るより外に、思はずなる事は、何ごとにか」とばかりのたまひて、

(須磨163)

京を去るにあたって左大臣邸を訪れ、別れの挨拶をするが、その夜は亡き葵の上付きの女房で源氏の召人である中納言の君と逢う。その明け方二条院に戻ると紫の上は格も下げずに夜通し源氏を待つ風情であった。源氏は紫の上が邪推をしているのではないかと話しかける。「例の思はずなるさまにや思しなしつる、」。(須磨163) それに対して紫の上は答える。「かかる世を見るより外に、思はずなる事は、何ごとにか」、「女性関係など問題ではない。このように酷いことがありますか」と。(須磨163) 源氏の女性関係を問題にするのではなくこのような世情をも視野に入れて真正面から源氏に返している。そこには機知に富んだ応答と知的に模索、探索する様子が描かれるが、それは既に成女としての紫の上である。これから二人で逆境へ立ち向かう為に、源氏を取り巻く環境と二人の関係を思索する紫の上がいる。

さて、源氏の違い目によって紫の上も人生の転機を迎えることになる。それは人生の節目、トランジションに当たる。キャリア論での節目またはトランジション<sup>9</sup>という考え方によれば自分の役割、人間関係、日常生活、考え方を変えてしまうような人生における出来事をトランジションと捉えて、その対処に焦点をあてる。そしてどんなトランジションでもそれを見定め、点検し、受け止めるプロセスを通じて乗り越えることが期待されるとする。その中でも第二段階のニュートラル・ゾーン<sup>10</sup>が最も重要であり、かつ必要とされるとする。紫の上は当初の第一段階「何かが終わる」、即ち今までの源氏を取り巻く環境の変化に伴い自身の立場や変化を見据えてそう認識していた。須磨の源氏からの文に「二条院の君はそのままに起きも上がりたまはず、尽きせぬさまに思しこがるれば、」(須磨181) という状態であったが、徐々に紫の上は自身の「できること」、「やりたいこと」、「やるべきこと」を実行に移す。以上の三つのことを考え、この間に応えることが即ち紫の上のキャリア形成に関わることであろう。いくらかの休息を経て紫の上は改めて自己と向かい合っていくことになる。すなわち、このニュートラル・ゾーンを経て自身の客観的側面を自分自身で意思決定することになる。そのためにはまず、主観的側面を把握しなければならない。紫の上の発言「かかる世を見る外に」にはそのような決意を読むことができる。ライフステージである、成長-探索-確立へと自己のアイデンティティを根付かせていくことになるのである。自身のパーソナルネットワークもこの頃になると以前よりは拡大し、自己にできることを

探索、模索し実行することになる。情報源はその人脈とともに拡散して行き、今や第二次、三次のネットワークを形成していたといえる。すなわちその多くは仕える女房達であったろう。当時の女房は一人の主人に仕えることもあったが、大概是数名の主人に仕える形で邸に出入りしていた。例えば、末摘花邸に出入りする大輔命婦なども両親それぞれが再婚をして複雑な家庭環境にあるが、父親の実家である常陸宮邸をやはり実家として宮中に出仕している。この大輔命婦のように闊達な若い女性が多く、情報をもたらす役目を負うところが多い。後年、蜻蛉巻では明石中宮付きの女房大納言の君は匂宮、浮舟、薫の関係を中宮の耳に入れる役目を負う。同様に中宮の娘、女一宮付きの女房小宰相の君なども浮舟失踪の件を、里邸で宇治邸の下童が語るのを姉を介して聞き、明石中宮の命で薫に浮舟存命を伝える役目を担う。女主人に仕える女房達も情報は里の周辺から入る、それが女主人にフィードバックされて物語を大きく動かす力となるのである。当時の女房達はそれぞれの貴族邸や宮中に仕えながら、里邸へ入る情報を得て、自身の主人にもたらす役目を自然と負っていた。それらは噂話としてあるいははかない物語として情報の輪を広げていったのである。

紫の上は人生の節目を乗り越える資源として自身の状況 (Situation) と自分自身 (Self) の立場の認識、そして周囲の援助 (Support) を得て戦略 (Strategies) を練り、自身のキャリア形成をして行くのである。

わが御方の中務、中將などやうの人々、つれなき御もてなしながら、見たてまつるほどこそ慰めつれ、何事につけてかと思へども、「命ありてこの世にまた帰るやうもあらむを、待ちつけむと思はむ人はこなたにさぶらへ」とのたまひて、上下みな参う上らせたふ。

(須磨169)

二条院の姫君は、ほど経るままに思し慰むおりなし。東の対に侍ひし人々も、みな渡り参りしはじめは、などかさしもあらむと思ひしかど、見たてまつり馴るままに、なつかしき御有様、まめやかなる御心ばへも思ひやりも深うあはれなれば、

(須磨198)

源氏は退去に当たり源氏付きの女房達を紫の上に預ける。女房達は紫の上を主人とすることに對して当初期待はしなかったが、その後紫の上の心ばえに打たれて源氏の留守中、紫の上の元を去る女房は一人もいなかった。元源氏付きの女房達をも取り込むことができたのも、また下仕え

の使用人やその里や実家からの情報をも得ることができたのは、ひとえに紫の上の親和力<sup>11</sup>によるところが大きい。京から絶え間なく贈られる文や「旅の宿直物など調じ奉りたまふ。」、(須磨182) 物資の送付など、紫の上は京から須磨の源氏を支えたのである。激しい嵐について到着した京からの使者は物資のみならず都の情報をも鄙にもたらずのであった。(明石214) 紫の上の殿舎、西の対に参集した人々はコミュニティを作り情報を共有して源氏不在の二条院を守ったのである。その際それぞれの役目に参画し協働力<sup>12</sup>を発揮した。また紫の上は家政にも長けていた。源氏のボスマネジメント<sup>13</sup>がそのまま紫の上に引き継がれ、紫の上はそれに応える能力を有していたのである。

さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、みな西の対に聞こえわたしたまふ。領したまふ御莊、御牧よりはじめて、さるべき所々の券など、みな奉りおきたまふ。それよりほかの御倉町、納殿などいふことまで、少納言をはかばかしきものに見置きたまへれば、親しき家司ども具して、しろしめすべき様どものたまひ預く。

(須磨168)

一方須磨に退去した源氏は翌年三月上巳の日に浜辺にて祓を行ったところ、俄かに暴風雨に見舞われ、邸には落雷があり、危険な目に遭うのであった。その後故桐壺院が夢枕に立ち、早々に須磨を立ち去るように告げる。一方明石では元受領で現在は出家生活をしている明石入道にも住吉の神が船を出すように夢告する。その誘いに従い源氏一行は須磨から明石へと移ることになる。

明石入道には年頃の一人娘がおり、入道は自身の大願成就の為娘を貴人に逢わせたいと熱望していた。一方娘は身分を恥じて不相応な源氏との婚姻を拒否していたが、源氏はとうとう入道の誘いにより娘の邸に通うことになる。当初は召人位に考えていたが、その娘の物腰は鄙で育ったとは言え、どこか六条御息所を思わせるような気品があり、手蹟や琴の演奏なども都人には劣らず、源氏は明石の君に惹かれていった。

流謫先での女性関係を源氏は紫の上に遠慮をしつつも、紫の上の耳に他から入ることを憚った。源氏は自身の真心を表すため紫の上に打ち明けるのであった。

二条の君の、風の伝てにも漏り聞きたまはむことは、戯れにても心の隔てありけると思ひうとまれたてまつらんは、心苦しう恥づかしう思さるも、あながちなる御心ざしのほどなりかし。かかる方のことをば、さすがに心とどめて恨みたまへりしをりをり、

(明石248)

源氏の紫の上への「あながちなる御心ざしのほど」、噂として紫の上の耳に入るよりは自ら話す。これが源氏の紫の上に対しての思いやりなのである。「まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりしふしぶしを、思ひ出づるさへ胸いたきに、またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか」(明石249)と、源氏は今までも紫の上を自分の浮気心から悲しませたことを重々承知しながら、明石の君との逢瀬を告げるのであった。源氏にとっても真心とは嘘をつかずに告げる事「あながちなる御心ざしのほど」なのであろうと草子地も述べている。それに対して紫の上の返事は何心なく、可愛らしく書かれていた。

御返り、何心なくらうたげに書いて、「忍びかねたる御夢語につけても、思ひあわせらるること多かるを、うらなくも思ひけるかな契りしを松より浪は越えじものぞと」 おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを、いとあはれにうち置きがたく見たまひて、なごり久しう、忍びの旅寝もしたまはず。

(明石249)

「何心なくらうたげに書いて、」「おいらかなるものから、ただならずかすめたまへるを」という返書であった。実に源氏を信じきっていた健気な姿が源氏に思い起こされ、それからしばらくは明石の君を訪れる事は絶えることになる。紫の上の「らうたげ」は源氏の開き直りともいえる言い訳に対して、正面から責めるのではなく、かすめるような意味の歌と手紙の文面であり、それは暫くは効力があつた。紫の上の源氏に対するコミュニケーションの取り方は例えば、「もの憎みはいつならふべきにか」(滯標281)と応答するように源氏からの教育によるところが大きい。そのように教えられた紫の上だったからこの場合も、反語的に源氏に程よく切り返している。和歌においては男性からの呼びかけに対して女性は切り返す形をとるのが常套であり、紫の上も源氏から和歌の手ほどきをそのように受けている。その類型に沿うならば紫の上は和歌の常套的な形式に沿いながらも、独自の表現法で答えていると言える。源氏とのコミュニケーションに独自のスタンスでもって応答しており、若妻としての印象を強くするところである。しかしながら第二部に進むと嫉妬心は表出よりも内向することになる。

さて、約二年半に亘る須磨明石での退去生活も宣旨が下り、都へ帰還することになる。明石の君との別れを惜しみながらも源氏は紫の上の待つ二条院へと帰還するのである。久しぶりに目にする紫の上は「いとうつくしげにねびととのほりて、御もの思ひのほどに、ところせかりし御髪のすこしへがれたるしもいみじうめでたきを」(明石261)と、美しく大人になっていた。たっぷりあつた髪も物思いの為かすこしすっきりした様子さえ大変すばらしい様子として描かれている。



留守を立派に守りとおした女主人の紫の上の姿であった。源氏はやはり会えなかった年月を思うのであった。

その人のことどもなど聞こえ出でたまへり。思し出でたる御気色浅からず見ゆるを、ただならずや見たてまつりたまふらん。わざとならず、「身をば思はず」などほのめかしたまふぞ、をかしうらうたく思ひきこえたまふ

(明石262)

再会を喜ぶのも束の間、源氏は紫の上に明石の君について話し出す。ただならない源氏の様子に紫の上はさりげなく「身をば思はず」とつぶやくのであった。引き歌により紫の上は嫉妬の感情を漏らしたのであるが、源氏は「をかしうらうたく思ひきこえたまふ。」と、思うのであった。あくまでも紫の上の嫉妬は可愛らしく度を越さない、許される範囲のものとして描かれている。「さすがに執念きところつきて、もの怨じしたまるが、なかなか愛嬌づきて」(濤標283)や「すこしわづらはしき気添ひて、かどかどしさのすすみたまへるや苦しからむ。」(朝顔482)などと、少し知性的で利発なところが源氏には困ることがあるとされる。

しかし、嫉妬心も紫の上の場合はその成長過程の一つであったと言える。嫉妬心は自身と他者との関係を図る情動であると言えるからである。激情ではなく、知的な感情発露として源氏には捉えられているのである。しかし第二部になると紫の上の嫉妬心は不安や恐れとともに自身の内側に抑圧され、表面的に発露することはなくなるのである。

## 5. あはれなりし世のありさま－確立

「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりには心もとなくて、思ひの外に口惜しくなん。女にてあなれば、いとこそものしけれ。」

(濤標281)

帰還後源氏は紫の上に明石の君について話す。明石滞在中も他から耳に入ることよりも自身から話すことが誠実な対応とする源氏であったが、ここでも紫の上に明石の君に女兒が誕生したことを打ち明ける。その際紫の上を立てることも忘れない。「生まれて欲しいところにはそのことがなくて、それが思いの外口惜しいのですが、女の子なので残念ですが、憎まないでください

ね」と、源氏は自身の論理で詰めていく。それに対して紫の上は「その憎むということは誰が教えたことでしょうか」と返す。それに対して「そよ、誰がならはしにかあらむ。思わずにぞ見えたまふや。人の心より外なる思ひやりごととして、もの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」（濔標282）と言って源氏は涙ぐむのであった。源氏は巧妙に論点をぼかして行く。そして涙をさえ浮かべれば紫の上もこれ以上続けられなくなってしまう。そして「よろづの事すさびにこそあれと、思ひ消たれたまふ。」（濔標282）と源氏の一時的な気まぐれごとなのだと思い、怨む気持ちも消えるのであった。源氏は明石の君に、これ程まで便りをするのは仔細があるが、まだ内実は紫の上には伝えない。実は帰京後「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし」（濔標275）との宿曜占いに告げられていた。明石の君の姫君が将来の后がねであることを源氏はほぼ確信している。その養育を紫の上に乗ねることを考慮していた。しかしまだそれを話す時ではない。源氏は更に明石の君の人柄について紫の上には話す。「まほならねどその夜の容貌ほの見し、琴の音のなまめきたりしも、」（濔標282）と明石の君の人柄に惹かれたことを打ち明けるのであった。

すべて御心とまれるさまにのたまひ出づるにも、我はまたとなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても心を分けたまひけむよ、とただならず思ひつづけたまひて、我は我と、うち背きながめて、「あはれなりし世のありさまかな」と、独り言のやうにうち嘆きて、

（濔標282）

源氏が明石の君に惹かれたのは一時的なすさび事と見なし、源氏を恨む気持ちが消えたのも束の間、源氏の明石の君を語るのを聞くと、またしても紫の上の気持ちは穏やかでなくなる。須磨明石流謫の間、自分はこれ以上悲しいことはないと思ひ嘆いていたのに、源氏は気まぐれにしてもこのようにその女君に心を分けていたかと思うと平静ではいられない。そして深く思い沈むのであった。そして紫の上は「我は我」<sup>14</sup>と自身を認め、自尊感情<sup>15</sup>を高めるのであった。

この時代での妻の立場については多様である。制度としては律令の下では一夫一妻制ではあるが、現実的には男性は多数の妻を持つ場合が多く、一般に認められていた。また正妻と妾、又は副妻などの区別も流動的であいまいな場合が多い。源氏物語の中での婚姻関係を見ると最初は男性が女性の元へ通う（源氏と葵の上など）が、子供が出来たり、邸宅を伝領した結果夫婦同居する形態もある。（頭中将と四の君、夕霧と雲居雁など）また長年連れ添った妻の元から男性が新妻の元へ通う婚姻形態も描かれている。（髭黒大将と玉鬘、源氏と女三宮、匂宮と六の君など）紫の上は源氏より連れ出され二条院西の対に据えられが、新枕の後裳着も行われ、一応は社

会公認の妻となっている。明石の君よりは身分的には高い。身分の高い女性は自分より身分の低い女性には嫉妬はしないとの当時の一般的な傾向から見ると、紫の上の嫉妬は源氏が明石の君の人柄に惹かれている点にある。この点は何ともしようがなく、紫の上の物思いの原因なのである。一方物語側から見ると程よい嫉妬は紫の上の美質であり、嫉妬を許される源氏の若き妻であると言える。

「我は我」と心のなかで眩き背を向ける紫の上は自身と向き合う。悲しみと嫉妬と恨みの混じり合った感情を自身でどう意味づけて良いのか、思わず、「あはれなりし世のありさま」と独り言を漏らす。源氏と共に須磨退去を耐え、留守を守ってきた時代は辛かったが、今はそれも懐かしく思い出される。二人の愛情が通い合っていた時に思いを馳せるのであった。

思ふどちなびく方にはあらずともわれぞけぶりにさきだちなまし 紫の上

誰により世をうみやまに行きめぐり絶えぬ涙にうきしむ身ぞ 源氏

(濡標283)

紫の上は源氏と明石の君の交わした手紙を引き、自分は先に火葬の煙となり消えてしまいたいと、ため息を漏らして歌うのであった。それに対して源氏の歌は返歌になっているか。紫の上の「あはれなりし世」の世は源氏と紫の上自身二人の愛情関係を述べたものであるのに対して、源氏の返歌「誰により世を」の世は世間一般を意味している。また歌と歌とが呼応せず贈答歌の体をなしていない。これらの二首はお互いのそれぞれの独詠歌のようである。しかも源氏の返歌の意味するところは「誰のために私は海山をさすらったか」と反語的な強い表現である。その後の言葉「いでや、いかでか見えたてまつらむ。命こそかなひ難かべいものなめれ。はかなき事にて人に心おかれじと思ふも、ただひとつゆゑぞや」(濡標283)と、紫の上が死にたいと歌ったのに対して「私こそ誰の為に苦労したのでしょうか。これもその内おわかりでしょう。それも生きて命があればこそですが、些細なことで人から悪意をもたれまいとするのも、ただあなた故からです。」と説得する。しかし源氏の言葉は紫の上の問に対して真正面から応えてはいない。源氏なりの論理で紫の上を封じ込め、紫の上起因すると説明する。そして、その場の雰囲気を更新するかのよう源氏は紫の上の琴を勧めるが、明石の君が琴の名手であることを耳にしては手も触れないのであった。

紫の上の「我は我」は心内語で眩きに等しいが、自身で現状を見つめ何とか立ち上がりたいとの小さな意欲の表れと見ることが出来るだろう。新妻紫の上の心中の言葉が声に出されることは

なかったが、これからの紫の上の人生において自身を確立するための思惟の一步と言えるのではないだろうか。この後松風巻で源氏は明石の君所生の女兒を紫の上に委ねるのである。明石の君よりは一段と身分の高い紫の上が養母となり養育することが、将来后となる女兒には必須だったのである。物語は紫の上の子供好きにより、継子虐譚を設定することなく自然に紫の上に女兒が委譲されるのである。それでも明石の君への嫉妬はその女兒が、源氏と紫の上の姫君として入内するまで続く。

このような状況下、紫の上は「我は我」として自身の立場を認知し更に自己を確立していくのである。姫君入内に際し輦車に同車して宮中に参内するのは紫の上であった。明石の姫君を愛育することにより母となり、自身の社会的地位をも高めていったのである。

## 6. おわりに

裳着後、紫の上は賢木巻で物語に再登場するまでの約一年の間に急成長を遂げた。少女から成女へと変容する、人生の節目、トランジションに際してコミュニティからの情報を得て、自身の立場を認識し、主観的側面を熟慮して客観的側面を作り上げた。そして今後の人生をいかに受け入れていくか、その場その時に最適な状況を作り出す才覚を発揮する姿に変容していく。須磨、明石、滯標巻での紫の上のライフステージを追い考察した。現代でも我々に人生の各ステージは「青春期が終わっても成長と発達を続ける。まさに死の瞬間に至るまでの成人期全体が、建設的対処を必要とし、個人の対応策のレパートリーを広げる新しい開発的課題の連続となる。」とする変容と一致するのである。

## 注

1. 人格の「変容」(transformation)・グールド (Gould, R.L.) は、精神科医としての臨床経験から、成人期にも心理的な転換期が存在することに注目した一人である。彼は、成人期の発達を、子供時代に由来する誤った信念を一つひとつ捨て去り、現実的で成熟した成人意識を獲得していく過程であるとする理論を提唱している。彼は「変容」という概念を「各人生段階で子ども意識と現実との葛藤の解決を通して、誤った信念が感情面で否定されるときに起こる、自己の変化」であると述べているが、人間がおとなになるには、一連の「変容」を経なければならないとする。

岡本祐子・松下美知子編『新女性のためのライフサイクル心理学』福村出版2002.

2. 個人のライフコースを生物社会的に、その生物的变化と文化的規範により、10年ごとに段階を示し、幼年時代からキャリアステージとしてとらえ、その各ステージを成長 (growth) - 探索 (exploration) - 確立 (establishment) - 持続 (maintenance) - 終盤 (disengagement) とする。  
スーパー (Donald E.Super) は成長から終盤、衰退までをMaxicycles キャリア発達段階としキャリアレインボーで示した。  
「キャリア発達論」『文部科学省高等学校キャリア教育の手引き - 第1節キャリア教育の必要性と意義』
3. 幸い人と評される人宇治の中君、「かばかりものものしくかしづき据ゑたまひて、心苦しき方おろかならず思したるぞ、幸いおはしたる。」(宿木400) などはその例であるが、世間一般と本人の認識には大きな差がある。
4. 「世の中いかがあらむ」の解釈について、『岷江入楚』三条西家の抄の説として「当代に成て時うしなひ給へる様なるを思ひ給ふ也」とあり、当時の政情を指すと解釈する。世、世の中などの語意は、通常男女関係、二人称を指す場合が多い。しかし一方で世間や社会一般、三人称をも意味する。この場合の世の中の語意は源氏と紫の上自身との関係ととれるが、同時に周囲の様子をも沈思しているのではないか。
5. 『源氏物語の鑑賞と基礎知識』「薄雲・朝顔」(194) 至文堂
6. パーソナルネットワーク (personal network) 特定の個人を中心に広がる他者とのつながりを意味する。集団や組織を中心にする場合には社会的 (social) ネットワークと呼ぶ。パーソナルネットワークは特定の個人が直接に接触したり知り合いであったりする人々とのつながりもあれば、直接には知らなかったり、接触のない人々とのつながりもある。直接の知り合いによって構成されるネットワーク空間は、第一次ゾーンと呼ばれる。特定の個人と直接に結びつかないが、第一次のメンバーを介して接触可能な人々とのネットワークゾーンは第2次ゾーンと呼ばれる。さらに、第2次ゾーンは第3次ゾーンに接続し、さらに第N次ゾーンへと拡大して行く。  
道幸哲也・原田順子『多様なキャリアを考える』放送大学教育振興会
7. 朝顔巻で紫の上は藤壺の身代わりを脱して行くとの論考がある。  
秋山虔「紫の上の変貌」
8. 須磨の巻では「世」の用例が多い。世間、社会一般の意が37例、男女間と解せる例は3例。
9. 節目、トランジション (Transition) という考え方を提唱する代表的な研究者シュロスバーグ (N. K.Schlossberg) メリーランド大学名誉教授) はトランジションを乗り越えるための資源として4 s システム、状況 (Situation)、自分自身 (Self)、周囲の援助 (Support)、戦略 (Strategies) をあげる。  
大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版社, 2013.
10. アメリカの心理学者ブリッジス (W.Bridges) はトランジションには三つの段階があるとしている。それは「何かが終わる」第一段階、「ニュートラル・ゾーン」(Neutral zone) という第二段階、「何かが始まる」第三段階である。第二段階が最も重要で、一人の時間、静かな場所、言語

化、休息などを意識的に確保して、改めて自分と向き合う必要があるとしている。

大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版社、2013.

11. 親和力 対人能力のひとつ、他者との間に豊かな関係を築く力。「親しみやすい」、「気配りができる」という段階を初歩として、「他者に興味を持つ」「共感する」「多様な価値観を尊重する」という段階に至り、「人間形成」「相互の信頼構築」までを含む。  
大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版社、2013.
12. 協働力 目標に向けて他者と協力しながら仕事を進める力、「自分や他者の役割を理解する」ことにはじまり、「情報を共有する」「お互いの足りないところを補い合う」という段階に至り「相談に乗る」「やる気にさせる」という段階に発展する。「役割理解」は究極的には組織全体の利益と自分自身や他者の得手・不得手を理解して、自らなすべきことをなす力である。  
大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版、2013.
13. アメリカではMBA講義のなかに「ボスマネジメント」という授業がある。いかに上司と上手く仕事を進めていくかということを教えている。  
大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版、2013.
14. 三村友希氏が『紫の上の〈我は我〉意識』で次のように述べる。  
「この紫の上の『我は我』は対話の拒否と言ってよい。『源氏物語』を英訳したロイヤル・タイラー氏は、この表現に関して疑問を抱き、(I am I) という、現代英語ではあまり用いられない訳をあえて施したという。紫の上がそれほどの個性や自尊心を持っていることに驚いたとし、これこそが第二部へとつながり、第三部まで影響を及ぼしていく、男女間の緊張関係の発端ではないかと注目している。」  
三村友希『姫君たちの源氏物語』翰林書、2008.
15. 自尊感情 自分と他人を比較した結果、自分が劣るように思えて劣等感を抱く為に起こる心理、他人を妬ましく思うこの感情は心理学で立証されている。  
自分自身を肯定的に評価する感情を自尊感情・セルフ・エステーム (self esteem) という。「人は人、自分は自分」と自身を認めることが、自尊感情を高める一歩となる。  
渋谷昌三著『心理学用語事典』株式会社池田書店、2016.

## 参考文献

校注・訳 阿部秋生・秋山虔・今井源衛『日本古典文学全集』「源氏物語」小学館、1995.

道幸哲也・原田順子『多様なキャリアを考える』放送大学教育振興会、2015.

大久保幸夫『キャリアデザイン入門』日本経済新聞出版社、2013.

三村友希『姫君たちの源氏物語』翰林書房、2008.

渋谷昌三『心理学用語事典』株式会社池田書店, 2016.

二村敏子・三善勝代訳『キャリアダイナミクス』白桃書房, 2005.

応用心理学学会編『応用心理学事典』丸善出版, 2011.

餅川正勝「学校における職業教育とキャリア教育に関する研究(1)」『広島経済大学論集第35巻4号』  
2013.